

合理的、同時に多量の人

間味

——相互印象・菊池氏——

芥川龍之介





書いてある。だから、細かい味なぞというものは乏しいかも知れない。そこが一部の世間には物足りないらしいが、それは不服を言う方が間違っている。菊池の小説は大味であつても、小説としてちゃんと出来上つている。細かい味以外に何もない作品よりどの位まし、だか分らないと思う。

菊池はそういう勇敢な生き方をしている人間だが、思いやりも決して薄い方ではない。物質的に困つている人たちには、殊に同情が篤いようである。それはいくらも实例のあることだが公けにすべき事ではないから、こゝに挙げることは差し控える。それから、僕自身に關したことでいうと、仕事の上のことで、随分今迄に菊池に慰められたり、励まされたりしたことが多い。いや、口に出してそう言われるよりも、菊池のデリケートな思いやりを無言のうちに感じて、気強く思つ

たことが度々ある、だから、為事の上では勿論、実生活の問題でも度々菊池に相談したし、これからも相談しようと思つてゐる。たゞ一つ、情事に関する相談だけは持込もうと思つてゐない。

それから、あたま頭脳のいゝことも、高等学校時代から僕等の仲間では評判である。語学などもよく出来るが、それは結局菊池の分析的のあたま頭脳のよさの一つの現われに過ぎないのだと思う。所謂理智の逞ましさにかけては、文壇でも菊池の向うを張れる人は、数えるほどもないに違いない。何時か雨の降る日に、菊池と外をそと歩いてゐたことがある。僕はその時、ぬかるみに電車の影が映つたり、雨にぬれた洋傘が光つたりするのに感服してゐたが、菊池は軒先の看板や標札を覗いては、苗字の読み方や、珍らしい職業の名などに注意ばかりしてい

た。菊池の理智的な心の持ち方は、こんな些事にも現われているように思う。

それから家庭の菊池は、いゝ良人でもあるし、いゝ父でもあるのみならず、いゝ隣人をも兼ねているようである。菊池の家へ行くと、近所の子供が大ぜい集まって、菊池夫婦や、菊池の子供と遊んでいることが度々ある。一度などは菊池の一家は留守で、近所の子供だけが二三人で留守番をしていたことがあった。こういう工合に、子供たちと仲がいゝのだから、その子供たちの親たちとも仲のいゝのは不思議はない。僕等の間では、今に菊池は町会議員に選挙されはしないかという噂さえある。

今まで話したような事柄から菊池には、菊池の境涯がちやんと出来上がっているという気がする。そうして、その境涯

は、可也僕には羨ましい境涯である。若し、多岐多端の現代に純一に近い生活を楽しんでいる作家があったら、それは詠嘆的に自然や人生を眺めている一部の詩人的作家よりも、寧ろ、菊池などではないかと思う。





底本：「大川の水・追憶・本所両国 現代日本のエッセイ」講談社文芸文庫、講談社

1995（平成 7）年 1 月 10 日第 1 刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第一～九、一二巻」岩波書店

1977（昭和 52）年 7、9～12 月、1978（昭和 53）年 1～4、7 月発行

入力：向井樹里

校正：砂場清隆

2007 年 2 月 12 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。